

そうだったのである。三浦北太郎中尉は、三浦先輩の身内だったことをこの時私は思い出して慄然としてしまった。私は思わず立ち上がって「北太郎はもうおりません」と言ってから、ハッと気がついて（私は何を言っているんだ。三浦大尉は北太郎の身内の方なんだ）「六月二十二日の作戦で沖繩に出撃して帰還しませんでした」と上官に申告するときのように申し上げた。一瞬、三浦大尉の顔に動揺が走ったように見受けられたがすぐに平静になられて「そうか、遅かったか。加美山は送ってやってくれたわけか」と話されて、暫く絶句しておられた。

私は何か話してお慰めしようと思い、前回の攻撃に未曾有の戦果を挙げて奇跡的生還をし、その経過を唖々として語ってくれたことなどを話した。領きながら聞いてはおられたようだったが恐らく耳にはいかなかったのではないかと思われた。話し終わって帰って行かれる時の後ろ姿が思い出される。

戦後三浦さんは盛岡で医院を開業され、岩手県医師

会会長等もやられたが、ある会合の際にその時の話を申し上げたら、当時のことを思い出されて「北太郎の父親が健在だから是非会ってやってくれ」と言われた。しかし、なかなか機会に恵まれず、そのうちにお父上はご他界されたとのことを風聞して残念に思っている。

〔編注〕

加美山茂氏の体験談は第XI巻及び第XII巻にも掲載されております。

海軍航空隊

大空に憧れて（一）

愛知県 榊 原定夫

青少年のころ

私の父は、牛・馬車はじめ普通の荷車などの製造と販売を業としていた。私は父の長男として大正十二

(一九二二)年七月にこの世に生を受けた。

昭和十一(一九三六)年三月に町立成岩尋常高等小学校を卒業し、さらに町立成岩公民学校の商業科を経て、当時は就職することなく、しばらくの間父の仕事の手伝いをしていた。

以来、日頃から夢を描いていた海軍少年航空兵に志願したいと決意し、昭和十六年初め、募集の機会がくるのを心待ちにしていた。当時勤務していた陸軍工廠(高蔵)を退社することにし、四月半ば、待ちに待った海軍志願兵の募集があり、私はその手続をとることにした。

学校が休みに入って間もない暑い日のさなか、半田小学校において身体検査や学科試験が実施され、私が軽率であったばかりに、私の希望する少年飛行兵(昭和十六年改称)の募集ではなく一般兵科の志願兵募集であった。

早速、私は試験管に「少年時代からの希望で、少年飛行兵を志願したいのですが」とその旨を伝えた。主任試験管(佐官)は「志願するなら贅沢をいうな。だ

が、海軍部内から飛行兵を志願し、選抜されれば飛行兵に転科できる制度もある。一旦は海兵団に入隊し、飛行兵募集の機会を待つて受験せよ」と説明を受けた。私は部内選抜で転科ができる方法を探ることとした。今回の身体検査と学科試験の結果は、間もなく「合格通知書」をもって知らされた。

私はまず、飛行兵を目指す、そのために飛行兵に選抜されるよう最大限の努力をし、必ず飛行兵に転科するのだという大きな信念をもって入団通知書の到着を心待ちにしていた。

十二月八日、わが国は遂に太平洋戦争へと突入していった。国内の戦時体制はますます高まっていった。私は海の若鷲となることを誇りとし、祖国の安泰を願い、あの大空で力のある限り戦うのだ、との情熱と意識はなんら変わることはなかった。

昭和十七年の一月末、呉鎮守府より、「五月一日、広島大竹海兵団に入団せよ」との、待ちに待った令状を受け取った。遂に来た。待ちに待ち続けた令状であ

る。胸の高まりを押え、四月末、国鉄半田駅前は、私と同じように大竹海兵団の入隊者を見送る人々でいっぱいであった。

幸い、晴天にも恵まれ気持ちも晴れやかに。あちらに一団、こちらにも一団と輪になって、寄せ書きの日の丸を振りながら、見送る人々の軍歌は晴れた大空にこだましていた。やや時間が経ち、市長はじめ在郷軍人や国防婦人会などのご挨拶があった後、私は家族や友人に見送られ、プラットホームでは「万歳、万歳」の声を後に、他の入隊者（十数人）と共に国鉄半田駅を出発、広島県の大竹海兵団への途に就いたのである。まさに青春時代の十八歳、海軍軍人として記念すべきスタートとなった。

五月一日、昼過ぎ無事に山陽本線の大竹駅へ到着した。まずは、半田の同僚らと共に徒歩で約三十分の大竹海兵団の隊門を潜った。隊門内は入隊者でいっぱい。私たちも受付で早速各分隊ごとに分けられ、一緒に入隊した半田の同僚たちとは離れ離れになった。私

は幸いにも半田出身の坂野純一君とは同分隊となり、住まいを聞いて、彼は山方新田（現在の瑞穂町）だと知った。まずは同郷者が同じ分隊員とは何よりも心強く、その後、海兵団出入りの写真屋に写してもらった写真をお互いに交換した。

ある郷土資料によれば、多くの艦船勤務や南方方面など各地を転戦し、また何人かは予科練を経て飛行兵として活躍、さらに特攻隊員として沖繩戦で戦死されたとある。この半田出身者の中で、阿部源一郎君（東雲町）は、私と同じく昭和十七年の入隊となっているが、私はこの人の名を知りもしないまま、昭和二十年四月初旬、後述の二五二空・戦闘三一六飛行隊に配属となった。この時、同じ飛行隊に半田出身の阿部源一郎君がいたとは思いつかなかったが、阿部君は四月末、一部の飛行隊員らと共に沖繩航空戦出撃のため、国分基地に進出していった。この時点では、お互いが半田市の出身者だと知ることもないままに。しかし、彼は国分基地へ進撃の途中、鈴鹿上空で戦死されたということであった。

海兵団の新兵教育

まず兵舎では教班別に分けられ、教班長は〇〇二等兵曹と紹介された。教班別に、一種軍装（冬季用）の上衣、ズボン、帽軍、リボン、艦内服、艦内帽、靴下など一式の服装が衣納袋と一緒に支給された。軍装を着用したが、我が教班からも、また別の教班からも「〇〇教班長、服やズボン、帽子が大きいのですが」と声が飛び交っていた。これに対し、どの教班長からも、その返事がふるっていた。

「よく聞いておれ、自分の体に服を合わせるのではなく、服に自分の体を合わせよ」と。兵舎内はワイワイ、ガヤガヤ、結局は、お互いに交換しつつ何とか体に合わせていたようだ。また、リボンの結び方も難しく、教班長は手とりして教えてくれたが、何回も結んではやり直しして何とかものになるようになった。だが、何となく格好悪い。次いで教班長は「陸軍の新兵は星一つで二等兵。海軍の新兵は二等兵だが、二等兵の階級章はない。従って左腕にも右腕にも階級章も何のマークもない。これを称して真っ黒だからカラスと

言う」と説明された。

ここで陸軍と違った海軍の軍服について触れておこう。

陸軍は、兵も下士官も将校もすべて服装は詰襟で五つボタンと統一されており、肩章または襟章に付す階級で区別されている。海軍の兵はジョンペラ服、下士官は詰襟に五つボタン、階級章は兵、下士官ともに左腕の外面に付す。準士官以上の士官はボタンなく、階級章は肩章または襟章となっている。

前述の衣類のほか、丸首で後にボタン一つの下シャツと袴下、靴下などが支給され、これら身に付ける支給品には、すべて分隊名、兵籍番号、氏名などを墨字で書き入れておく。でも洗濯後、なぜかよく支給品が紛失するから不思議で、我々は員数確保が大変である。

次いでハンモックの就寝用として毛布が数枚支給されたが、そのハンモックで釣床訓練と称して教班長の笛を合図に結わえたロープを解き、解き終わると再

び、笛を合図に結び直す、といった訓練が延々と続くのである。その度ごとに教班長は「遅いぞ、遅いことなら赤子でもする。気合いを入れてやれ」と大いにハッパを掛ける。この釣床訓練は起床ラッパと共に始まる。夕食後に、再び何度も繰り返して続けられ、我々は汗でビッシヨリ、この訓練も日課の一つとなった。

新兵の教育の第一歩は、「軍人に賜りたる勅諭」五箇条の唱和から始まった。

- 一 軍人ハ、忠節ヲ尽クスヲ本分トズベシ
- 一 軍人ハ、武勇ヲ尚ブベシ
- 一 軍人ハ、礼儀ヲ正シクスベシ
- 一 軍人ハ、信義ヲ重ンズベシ
- 一 軍人ハ、質素ヲ旨トズベシ

この聖訓は、毎朝の朝礼で唱和させられ、頭の中に叩き込まれたものだ。さらに軍人精神の訓話、敬礼などが相次ぎ、特に敬礼動作は陸軍と違い海軍独特のもので、教班長は「海軍の諸動作から服装に至るまで、すべて艦内勤務を前提としたものである。特に、敬礼

の場合は狭い艦内においても敬礼ができる所作で、陸軍のとは違う」と掌を四五度手前から最短距離で、掌を目の前にもってくるように訓練を受けた。

五日目に入団式が行われた。呉鎮守府長官の豊田副え武中將（後の連合艦隊司令長官）の訓示、各分隊単位の検閲があり、この時こそ何となく身の引き締まる思いでいっぱいだった。この入団式終了の二、三日過ぎた朝食後、〇〇先任教班長より、「新兵の中で、鋸や鉋の使える経験者はおらぬか」の声に、井上二水（大工）と、私も共に名乗り出た（父の手伝いで多少の経験があった）。すでに用意されていたのか二寸角の桧材が兵舎のデッキに持ち込まれた。

「よし、この角材を適当な長さに二、三回切ってみよ」と言われ、先任教班長から九寸鋸を手渡され試された。早速私たち二人の者は、鋸を手にして切り始めたが、久しぶりのことであり、心配しながら自分では切り口から見て何とか上手く切れたと思った。井上二水も同様に切っていった。先任教班長は、我々の切っ

た材木の切り口を眺めていたが、「よし、今日からお前たち二人は清掃用具の修理やその他、お前たちの判断で製作が必要と思われるものがあれば、それを製作する作業をせよ」と指示され、二人は直ちに相談の上、簡単な図面を書き、材料の手配などの準備に入った。それ以来、時には他の同年兵は甲板掃除で絞られていても、教班長に「△△の修理を行いたいと思いません」または「◇◇を作りたいと思えます」といって許可を頂き、製作や修理などを行うため、デッキを離れ物置の作業場へ、これで私たちは新兵教育期間中は甲板掃除で絞られることもなく、お陰で随分業をさせて貰った。「一つ、軍人は要領を本分とすべし」こんなことを誰となく耳にしたことがある。

日課も時には、体力練成の海軍体操、徒歩訓練や手旗・旗旒きりゅう、信号、ロープなどの結索訓練作業からカッター訓練など、これらが我々新兵教育の中心科目となった。また徒歩訓練は陸軍の歩兵と同じように三八銃を担いで「前へ進め」「回れ右」「駆け足」「分隊止まれ」の教練が続き、この訓練も私たち新兵にはきつ

く、毎日がヘトヘトであった。

こうした訓練終了後の疲れと空腹に頂く食事は、普通の時の食事と違い、これほど旨く味わったことはなく、何ととっても食事はど最大の楽しみはなかった。入隊前、軍隊の飯はクサイ飯だと耳にしたことがあったが、実際には、三分程度の麦は入っていたがクサイどころか結構な味の三度、三度の食事であった。この食事の楽しみと共に、夕食時の終わるころには「酒保開け」の放送がある。これも我々新兵にとっては、また最大の楽しみでもあった。うどん、汁粉、果物（季節もの）、生菓子など、酒保の定められた場所での自分の好みのものを食べたり、飲んだりして、その日の出来事などを話し合うのも、また楽しみの一つでもあった。

さらに一日の疲れを洗い流す入浴時間も、また楽しみの一つでもあったが、我々新兵は残念ながら浴槽に入る時には何かと制限がつけられており、町のお風呂に入るような調子にはいかなかった。それには、次のような規則が定められていた。

一 入浴時には、体を綺麗に流してから入る事

一 浴槽の中には絶対に手拭を入れてはいけない

一 浴槽内のお湯を清潔に保つため、

手を体に触れてはいけない

一 入浴中は必ず両手の人差指を水面に出しておく

事（潜望鏡の様に）

等々、以上のように書かれた木札が浴室の入り口に掛けてあった。

しかし、浴槽は結構深くなっており、立ってもいとも湯が肩のあたりまでくるので、とても座ったり腰を落とすなどできるような状態ではなかった。

また時には、銃を担いで野外訓練の行軍も、苦しかったが結構楽しく、特に卒業間近になって、教班長の引率で水筒と弁当を肩に掛け、錦帯橋への行軍は楽しかった。このように新兵教育も一つ一つ覚え、一、二カ月と過ぎていったが、カッター訓練は特に厳しく、少しでも力を抜けばバッタで叩かれる。

八月半ば、新兵全員は海軍一等水兵を拝命し、同時に、私は工作艦「明石」に配属を命ぜられた。「明石」

乗艦後、兵科の二個分隊に各三人が分隊ごとに分けられ、私たち三人は第六分隊に配属、私は爆雷関係担当になった。翌夕刻「明石」は呉軍港を行く先知らされぬままに出港した。一週間位の航海を経て、夕刻近く南太平洋の海軍の最前線基地トラック島の夏島に無事投錨した。

翌朝、甲板に出て驚いた。巡洋艦や駆逐艦などが何隻も停泊しており、やや遠くには巨大な戦艦「大和」の勇姿を確認した。また、水上偵察機が白波を立てて離水して行く有様を目の前にして、少年時代目にした新須磨海岸での海軍機の訓練の様子を見て「もし操縦員になるなら水上機操縦を」との決意を改めて思い出した。

四、五日が過ぎた午後の作業中「工作分隊員は、直ちに中央甲板集合！」と、当直の号令。ふと見ると艦首部分が引き裂かれた巡洋艦一隻が近づいて来た。ソロン海戦で敵艦の砲弾を受けた巡洋艦「神通」で、応急修理のためと判明した。約一カ月で応急処置ではあったが、見た目には元の艦首と変わらぬ立派な補修

が出来た。

スコールが来る。「全員、スコール浴用意！」の艦内放送。私たちにとっては初めて聞く奇妙な放送であった。早速裸になりスコールの来るのを待った。艦内勤務ではなかなか入浴する事ができなかった。トラックでの生活、子供らとの交流、その両親の歓迎、こんな楽しみも何回となく続くうちに、私の心は、いつしか「飛行兵転科」を半ば忘れ掛けていた。

そんな気持ちでいた十一月初めの朝食後、先任下士官より飛行兵募集の通達が発表された。早速、私は申込みをしたが、先任下士官は「ようやく艦にもなれたことだ、このまま艦に残る気はないか？　ただ俺は、本人の意志は尊重したいので、無理に引き留めはしないが」と、この言葉を私は聞いて「ありがたいお言葉ですが、自分の少年時代からの希望でもあり、是非この機会に、自分の信念を貫きたいと思っております」と返事をした。

数日して、受験（第一次試験）の日がやって来た。試験問題の大部分は学科試験であった。けれども、海

兵団入団後三カ月の間と「明石」に配属されて以来、機会を見て夜遅くまで勉強に努めてきた甲斐あり、艦内から三人の受験者があったが、幸いにも、私一人が合格することができた。この合格の発表と共に第二次試験受験のため、分隊長より「岩国海軍航空隊に入隊を命ず」の辞令を受けた。僅か三カ月の外地勤務と艦船勤務であったが、私の体験は以上のようなものであった。

このトラック諸島も、昭和十九年二月以来、米機動部隊の九次にわたる大空襲で、我が軍は約六千人が戦没、艦船五二隻が沈没、飛行機一八〇機が破壊され、トラック島は海軍の太平洋の最重要基点の機能を完全に失った。お世話になっている分隊の下士官クラスからは「何だ、飛行兵に転科するのか、飛行兵は消耗品じゃないのか」と何人かに嫌味とも取れる言葉を何度も聞かされた。私たちは、使乗者だけに必要以外の言葉は余り受け答えはせずに、出来るだけ無言に近い「ハイ」「イエエ」の返事で通した。ただ太平洋上は戦

場である。乗艦中は、どこで敵の攻撃を受けるかも知れず、不安で気にはかりしていた。トラック島に向かう時には考えもしなかったのに……。

「熊野」に便乗し、トラック島を出港して以来、太平洋の荒波に揺られること約六日間で、ようやく波静かな瀬戸内海を航行中かと思われるころ、「便乗員は、退艦の用意をせよ」の放送を受けて、「熊野」に乗艦して以来、上甲板に立つことは許されなかったので、何日ぶりかで、上甲板に姿を現すことができた。ちょうど三月前、海兵団の教育も終了、「明石」に配属、乗艦して間もなく、どこへ出港するのか耳にすることもなく出港した、あの懐かしい呉軍港に入港したのである。退艦した折に、消耗品呼びわりを言われた下士官も「無事飛行兵になって、大空で元気いっぱい頑張れよ」と励ましてくれた時には、涙の出るほど嬉しかった。「便乗中はお世話になり有難うございました。皆さんお元気で」と便乗者全員が親しみの持てる挨拶を交わして退艦した。階級こそ違っている、同じ海軍の軍人だなぁと、感激を胸にお別れを告げた。

適性検査と予科練教育

十一月二十日、私は同僚らと共に薄暗くなりかけた岩国航空隊の隊門をくぐった。早速、当直兵に兵舎へ案内をされたが、兵舎は、すでに練習生を指す百人を越す兵隊でいっぱいであった。その後、時間の経過と共に入隊者はさらに増えて来た。さらに一日、二日が過ぎて行くのに従い、予科練兵舎は四百人有余の大所帯となった。

もちろん、兵舎の中は見知らぬ兵隊ばかりである。徐々に話をするうち、その大部分は、私のように艦船部隊より選抜されたものが多く、他に地上部隊より選抜された者で、その多くは十七志（昭和十七年入隊の志願兵）の同年、一等水兵や整備員、機関兵などであった。残念ながら不思議な位、一人として顔見知りの兵隊はいなかった。その他十四志願、十五志の兵長クラスや十六志の上等兵などが二、三十人位いたであろうか。

二、三日後、飛行兵（呼び方が変更された）として適性かどうか、検査（第一次試験）が始まったが、こ

の時点ではあくまで仮の練習生である。

まず、この検査は、健全で耐久力のある体であるかどうか、搭乗員として最小限の必要な知能を持っているか。心理的な要素など、第一段階の適性検査が行われた。さらに、科学的な各種の器具を使って視聴反応感覚、転倒試験、遠近判定、運動性に対する反応機能、その反応時間、処置判断など、それぞれ初めて受ける検査ばかりが毎日のように続いた。

特に後半の身体平衡感覚の適性検査は、椅子に腰掛け、回転する椅子は一定の回転数に達すると急速にストップ。直ちに床に下り、直立不動の姿勢で一〇歩ほど目標に向かい歩かされる。この時、直立不動の姿勢が振らつき、悪ければ目を回して、その場に座りこんでしまう者もいた。このふらついた者や、目を回した者は、この段階で二次試験は不合格となったようである。第二段階は、フライトシミュレーター（真空ポンプで作動する飛行機を模型化したもので、操縦桿、方向舵などの操作により実機と同じ作動をする）の適性検査であった。これは操縦員として操縦操作が技術的

に的確であるかどうか、この適性検査も厳重に行われ、多くの受験者は何とか合格しようと操作に必死であった。

この適性検査ばかりは勉強する方法もなく「エイ、なるようになれ」と度胸をきめ、慎重に操縦操作を行った結果、試験官の「ヨシ」の声にホッと胸を撫で下ろした。この検査で、不適當と判断された何人かの者は、偵察員に確定されたようであった。岩国に入隊以来、何日間も時間を要し、今日はこちらの検査場、明日はあちらの検査場と渡り歩き、毎日の厳格な適性検査（第二次試験）で、全般の検査結果は二十数人のものが「この試験による適性検査の結果、貴様達は飛行兵に向かず不合格である」と主任検査官より原隊へ復帰と言い渡されていた。

終局は、海軍部内より選抜され、集結した四百十数人のうち、第二次試験で三百九十七人が飛行予科練習生（予科練）に抜擢され、ここに飛行兵としての道が開かれた。

飛行予科練習生の教育開始

その翌日、早速入隊式が行われた。司令より「丙種第十四期、海軍飛行予科練習生を命ずる」と任命され、予科練として第一歩を踏み出すことになった。

【参 考】

飛行予科練制度の変遷

海軍の航空事情は、大正五年四月、海軍部内より抜擢された下士官が航空術（操縦）講習員として試験的に採用された。大正九年二月、横須賀航空隊練習生規則が制定されると同時に正式に下士官・兵の部内選抜の採用が制定された。同年四月、横空に第一期の航空術練習生八人が入隊、一年の練習を経て、操縦員として卒業、いわゆる第一期航空術練習生の誕生となったのである。

その後、航空員数拡大のため、昭和五年六月に少年航空兵（小学校高等科卒業と旧制中学二年まで）の制度が制定された。

この制度化に伴い、航空術練習生は操縦練習生（操

練）と名称が改められた。これ以後、多くの操練出身搭乗員は海軍航空部隊の主力となり、その戦功を世間に轟かせた。一方、少年航空兵は軍隊生活の経験がない。軍隊経験者の操練と違い、まず海軍軍人としての基礎教育を中心に訓練と教育期間を設置した。この期間中を予科練習生と名付けることになった。

さらに昭和十二年八月、航空隊練習生規則が改正され、旧制中学卒業者を採用することが制定され、同年九月には横空に最初の旧制中学卒業者（第一期生）が入隊した。昭和十五年十月、航空本部は、この旧制中学卒業者を契機に、旧制中学卒業者を甲種、少年航空兵を乙種とし、操練を廃止して名称を丙種と改正した。丙種予科練習生は操練と同じく海軍部内の全般より選抜することとなった。

航空術練習生

航空術練習生は、海軍下士官・兵にして、次の各号に該当する者の中よりこれを選抜す。

①所定の身体検査規則に合格したる者。

②品行方正にして禁固以上の刑に処せられたることなき者。

③年齢、二十二歳未満の者。

④高等小学校卒業程度以上の学力を有する者。

⑤飛行機操縦者として適當なる能力を有するものと認めたる者。

大正九年四月一日よりこれを施行する

丙種予科練習生

丙種予科練習生は、操練の精神を受け継ぎ新しく充足した。継承の手順として、操練の第五十七期を丙種の第一期生として三十二人を採用。一カ月半の予科練習を終了したのち、鹿島空に入隊した。第五十八期は、丙種第二期の予科連として土浦空に入隊、一カ月半の予科練習を終了した。当初予科連の教育期間は、甲種が一年八カ月、乙種は三年（後に、甲・乙共に十カ月）、丙種は六カ月（後に、三カ月以内）と定められた。

昭和十六年六月、航空兵の名称を飛行兵と変更し、

予科練習生を飛行予科練習生と改め「何種何期、飛行予科練習生」と呼称した。昭和十六年十二月、太平洋戦争が開戦し、戦局は厳しく、昭和十八年に海軍部内の要員不足を生じ、部内選抜の丙種の確保は困難となり、丙飛は第十七期を最後に廃止となった。

この要員確保は、昭和十八年四月、航空隊規則を改正し、乙種採用者の一部から短期間教育に耐え得る者を選抜、急速に大量の搭乗員養成を行うものとして誕生したのが乙飛（特）で、これを制度化せざるを得なかつた。丙飛は乙飛（特）にバトンを渡し、操練より継承された部内選抜の幕は降ろされたのである。

第五十六期まで続いた操練時代から、丙種は十七期で終わり、乙飛（特）は一期より十期まで続いたが、昭和十八年代の日本はもはや末期状態で、三、四期位までは辛うじて飛行部隊に配属となったが、第五期以降の練習生は、大部分が「震洋」「回天」などの水中特攻艇の搭乗員となり、一部は予科練が土科連と呼ばれるほどの雑役に終始した。

部内選抜の我々丙飛は、甲飛、乙飛の同時入隊とは

違い、同期イコール同年兵ではなく、我々、丙飛の第十四期生は十五志から十七志入団の現役兵から選ばされた編成である。

我々丙飛の子科連教育は、前述の甲飛、乙飛とは違い、海軍軍人のイロハは新兵時代に終わっており、子科連教育の期間も二カ月と短縮されている。従って、教育講座の中心は搭乗員として必要科目の「航空力学、流体力学」など理論が柱で、その他、航空氣象学、通信術などで、特に航空力学の「翼面積と空氣抵抗」など頭を悩ますことばかりであった。

こうした座学中心の子科連教育が終了する二カ月後、練習生の適性に応じて、陸上機と水上機の操縦員及び偵察員に選ばされた。陸上機と水上機の操縦員二百三十八人、偵察員百五十九人に分けられ、各々航空隊に配属と決定された。私は水上機操縦に選ばされ、子供時より目指して来た「水上機操縦」の念願はここに叶ったのである。

大東亜戦争緒戦

死すべき命永らえて

三重県 藤原長録

振り返って思い出しますと、私らはちょうど大正デモクラシー気風と、一方では昭和の時代初期の建国復興、国威宣揚の掛け声の中で、日に日に軍国国家へと一歩一歩近づいている、そのような環境で教育を受け、育って来たような時代でした。

考えて見ますと、そろそろ物事が分かりかけて、学校へ行きますと、どこでも同じように、まずやかましく言われたのは「不況」の話でした。いわゆる大正の戦後（第一次世界大戦後）景気が一時ありまして、この上野市も栄えて来ましたが、それが終わりますと、今度は不況が来ました。予讃銀行が倒産したなど、覚えておられる方もあるでしょうが、そういう時代でした。だから不景気の中に、今の時代と同様に、私らが